論壇　国観、神話神話からの脱却潜在力の過大強化戒める中嶋氏　日本経済新聞-1979.11.28

日本経済新聞　昭和54年（1979年）10月28日（日曜日）

中国観、神話からの脱却

「現場」は問わず語る

潜在力の過大評価戒める中嶋氏

経済論壇から

飯田　経夫

ひとたび経済の「現場」に触れるとき、経済学のフレームワークがいかにひよわで、いかにもろいかということを、私は近年しばしば感じ、語ってきた。しかし、じつをいうと、その際つねに私の心中にあったのは、それはひとり経済学にかぎらないだろうという、一種の居直りである。たとえば中国専門家は、中国の激動を理解するために、いったいわれわれに何を教えてくれたであろうか。はじめて中国の「現場」をみた後、私はこの疑問を昨年八月の本欄で述べたが、この夏、再び中国を旅する機会を得た後にも、その感じは強まるばかりであった。だが、中嶋嶺雄氏の力作「文明の〝再鋳造〟をめざす中国」（『中央公論』十一月号）を一読して、私の渇望は大きくいやされた思いがする。やはり専門家はあだやおろそかな存在ではない。

○　○　○

農民を追い払う幹部

百二十枚にも及ぶ内容豊富なこの論文をあえて整理すれば、明らかにその主調は、初めのほうで提示される人民公社のエピソードだろう。

「私たちが果樹園を見学に行った際、……二、三十人の老若男女の農民たちが遠方にどこからともなく現れて、いかにも物珍しげに恐る恐るといった感じで私たちの方へ向かって一歩一歩近寄ってきた。……ここの農民は、その衣服の粗末なこともあってか、なかには裸足の者も多かったこともあってか、ひときわ遠慮がちに見受けられた。……と、その瞬間、私たちを案内していた公社の幹部と運転手が、まるで穢（けが）らわしい動物にでもたいするように、彼らを叱責し、追い払ってしまったのである。そのときの、いかにも屈辱に満ちたまなざしで後を振り向きながら退散してゆく農民たちの表情が、いまも私の脳裏に焼きついている」

そのとき中嶋氏は、「伝統的な中国農民の姿と旧中国農村の支配階級——郷紳・土豪のイメージを重複して想起しないわけにはゆかなかった」のである。つまり、「農民を追い払った幹部は、旧中国における租税や小作料の徴収人と、どこが違うのであろうか」

これまで中国専門家たちは、革命をになう「人民」のすばらしさについて、種々語ってきた。だが、ひとたび「現場」に接すれば、「人民」とは、これほど「屈辱に満ちたまなざし」をし、これほど「恐る恐る」「遠慮がち」に行動しながら、なおかつ「まるで穢らわしい動物」のように追い払われなければならない人びとのことなのである。そうした光景は、人民公社にかぎらず、都市の街角にも、名所旧跡にも、鉄道駅にも、しばしば見受けられる。私自身を含むごくふつうの訪中者にとって、それは大きなショックだろう。しかし、それが意味するものをより深く追求することは、私のような素人にはできない。ただ、イデオロギー意識が過剰で、肩に力が入りすぎた人びとは、ただちに「社会主義」の失敗をあげつらうかもしれないが、話がそれほど単純ではないだろうということは、素人にも薄々ながら見当がつく。早い話が、毎朝必ず道端に餓死体が転がっていたという「解放」前の [illegible]

○　○　○

三千年余の歴史の中で

まさに中嶋論文がさまざまな角度から説得的に論証する通り、「三千年有余の歴史を刻んできた社会が、わずか三十年間の社会主義建設の過程でその伝統や民族的・文化的個性を完全に変革してしまったなどと考えるのは、途方もないこと」だというのが、最大のポイントであろう。つまり、「今日の中国の政治的・社会的諸事象も、〝毛沢東思想〟やマルクス・レーニン主義の教典解釈によるよりも、中国に固有な政治文化の理解によって、よりよく説明し得る」のである。一時期の経済学者のように、「中国モデル」＝「毛沢東モデル」を「第三世界開発の新しいモデル」であるかに称揚したり、昨今の「西側諸国とくにわが国の政財界」のように、「四つの現代化」のスローガンをみただけで、中国で高度成長による [illegible] に錯覚したりするのも、軽率きわまる早とちりでしかない。

しかし他方、中国社会の「不易固定性」「恒常性」を強調するのあまり、いわゆる「アジア的停滞」史観に陥ることに対しては、中嶋氏はきびしく警戒的である。そしてそのことは、議論にダイナミックな緊張感を付与して、この論文の大きな魅力をなすとともに、率直にいって、それをきわめて読みづらくしている。ごく平たくいうと、てこでも動こうとしない社会に対して、いやでもそれを変えずにはおかない力が、いまや内外両面から作動しはじめ、「ポイント・オヴ・ノー・リターン」の地点まで到達した——というのが、氏の基本認識だろう。しかし、「全人類人口の四分の一を擁する巨大な国家が、最大かつ最古の文明の……根本的な〝再鋳造〟を試みつつ、いよいよ本格的に〝離陸〟を開始したという意味において、これまでの世界史上に前例を見ない」事件だとするのは、ロゴスよりはパトスの勝った言い方だろう。「今日の中国がどこへ行くのかは、今世紀の人類に残された最大の文明史的課題だ」というのも、そうではないか。「人類のすべての潜在的な可能性が将来の中国に残されている半面、人類のとてつもない危機をも中国の将来は内包している」というのも、いささかオーバーではあるまいか。

○　○　○

「当たり前の途上国」

代中国の行方」を占い①ソ連型社会主義への回帰②ユーゴ・モデルへの接近③「当たり前の途上国」に「堕する」可能性と、三つの選択肢を考えている。この示唆あふれる議論の中で、私に著しく意外の感を与えるのは、中国が「当たり前の途上国」に「転落」することが、「まさに人類の危機へと連動しかねない」ような「不吉」さを含む——という指摘である。いまさらそこへ「堕し」、「転落する」までもなく、いまの中国そのものが、まさに「当たり前の途上国」にほかならないのではあるまいか。世には「中国神話」が根強く、それが中国専門家の議論をひどく不毛にしている。そのことを知りすぎるほど知っている中嶋氏にして、なおかつ「中国神話」から完全に自由ではないらしい——というのは、おそらく失礼であろうか。むしろ私のほうが、いわば「経済学帝国主義」のナイーブさに災いされている点を、中嶋氏はきびしく批判されるであろうか。

あるいは中嶋氏と私とは、それほど別のことを考えてはいないのかもしれない。私は、南北問題は「世紀の課題」だと考えているし、もしそれへの対処に失敗すれば、人類はある種の「危機」に直面するだろうと予測している。中国は飛び抜けて最大の途上国であり、しかもわが隣邦である。明らかに、日本が中国の近代化に協力するのは、非常に重要なことだろう。私個人の感情からしても、中国にはぜひともよくなってもらいたい。だが、近代化にしてもそれへの協力にしても、ただお題目を唱えるだけでできるようなことではけっしてない。

日曜もだんあーと　「真夏の夜の夢」　利根山光人